



| | |
|--------------|---|
| Title | 日本語と中国語の複数形態素と類別詞表現の共起に関する考察 |
| Author(s) | 越智, 正男 |
| Citation | 言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 11-20 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/102181 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語と中国語の複数形態素と類別詞表現の共起に関する考察*

越智正男

1. はじめに

Chierchia (1998) 等によって指摘されているように、日本語や中国語の名詞項には数詞が類別詞を伴って出てくる点や単数・複数の区分を明示的に(かつ義務的に)マークする必要がない等の特徴がある。このような先行研究での知見を受けて、類別詞言語の量化表現や複数形態素の統語や意味の研究も近年大いに進展してきている。本稿では、類別詞表現と複数形態素(特に「連結読み (associative plural reading)」のマーカ―)が同じ名詞項領域に生起する場合の意味解釈の制約に焦点を当て、統語構造の観点から説明を試みるものである。

2. 名詞句内の複数形態素と類別詞の共起について

本稿で扱うのは以下のような例である (Ochi (2012) を参照されたい)。なお、本稿では主に「ら」を用いるが、これは「ら」の使用が連結読みの解釈を容易にするためである。

- (1) 私は 10 人の学生{たち/ら} を招待した
- I invited ten students.
 - 'I invited a group of people consisting of 10 students and others.'
 - *'I invited a group of 10 people consisting of students and others'

(1a) は複数解釈 (sum/additive reading, 以下 PL_{sum} 解釈) であり、多くの話者がこの解釈を問題なく許容する。一方、連結読み (associative plural reading, 以下 PL_{assoc} 解釈) に関しては、可能であるが、制約がある (Ochi 2012)。具体的には、(1b) の解釈が可能なのに対して、(1c) の解釈は厳しい。言い換えると、「10 人」は学生の数であって、学生を含む集合(グループ)のメンバーの数ではない。実際に、Sugisaki (2025) の 5~6 歳の日本語母語話者を対象とした調査でも、このような例文は (1c) のような解釈を許さないことが報告されている。¹

同様のことが中国語の複数形態素にも言える。まず、Li (1999) が指摘するように、中国語の PL マーカ―の *-men* に関しては、類別詞表現と共起しない(傾向がある)。一方、もう 1 つの PL マーカ―である *děng* の場合には状況が異なる。この PL マーカ―は複数解釈を持

* 本稿は Western Conference on Linguistics 2024 (WECOL 2024) での成果発表を踏まえて、現在行っている調査の経過報告である。Yunwen Chen 氏には中国語のデータに関して協力していただいた。ここに感謝を申し上げる。本研究は科学研究費基盤研究 (C) (No. 24K03963) の助成を受けて行われている。

¹ Sugisaki (2025) の研究では「ら」ではなく「たち」を用いているが、議論の本質は変わらない。

たず、常に連結読みを生じるマーカであるが、話者によっては *děng* と類別詞表現の共起は可能である。実際に、Hu and Pan (2004) ではこのタイプの例文が容認されている。重要なのは、(2b) の解釈が可能であるのに対して、(2c) の解釈がない点であり、これは日本語の場合と同じである。なお、先述の通り *děng* は複数解釈をもともと持たないため、(2a) の解釈はない。

(2) Wǒ yāoqǐng-le shí-ge xuéshēng-děng rén. (Chinese)

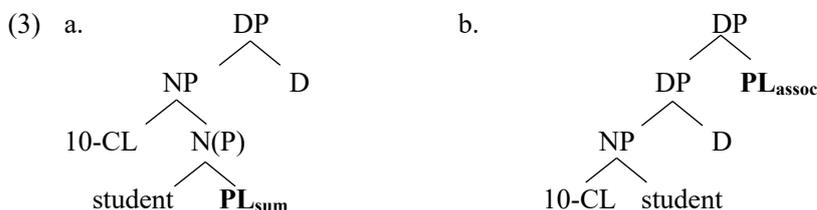
I invite-Asp ten-CL student-PL_{assoc} person

a. *I invited 10 students.

b. 'I invited a group of people consisting of 10 students and others.'

c. *'I invited a group of 10 people consisting of students and others'

(1) でも (2) でも (c) の解釈がないという言語事実に対してどのような説明が可能であろうか。Sugisaki (2025) でも論じられているように、(i) PL_{sum} が裸名詞句 (NP) と併合するのに対して、PL_{assoc} が名詞項全体 (DP) と併合する (Ueda and Haraguchi (2008) や Lewis (2022) も参照されたい)、(ii) 「10 人」等の量化表現は裸名詞句 (NP) と併合する (Li (1999) や Saito, Lin and Murasugi (2008) を参照されたい)、と仮定すれば、説明が可能になりそうである。



(3a) にあるように、「数詞 + 類別詞」表現も PL_{sum} も同じ領域 (例えば NP の領域) の要素であるとすれば、「学生 + PL_{sum}」が「数詞 + 類別詞」表現の作用域内に位置することも可能であろう。これは (1a) の解釈が可能であることと合致する。一方、PL_{assoc} が常に「数詞 + 類別詞」表現よりも構造的に高い位置に併合されるのであれば、後者が前者をその作用域に持つことはなく、(1c) や (2c) の解釈は生じないことになる ((3b) を参照されたい)。

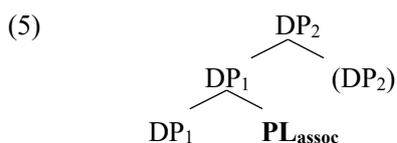
この分析は確かに上述の言語事実を上手く捉えることができる。しかし、Ochi (in press) で論じられているように、PL_{assoc} を含む名詞項構造が (3b) よりも複雑であるとする、上述の考え方は再考を迫られることになる。以下この点について考えていく。

3. 連結読みマーカを含む名詞句の統語構造

Ochi (in press) では、以下の例のように、PL_{assoc} の後にもう一つ名詞句が来る例を分析の対象とし、Tatsumi (2017) の考えを採用して、PL_{assoc} は常に 2 つの名詞句を選択すると提

案している。例えば、以下の (4a) では、「太郎」と「日本の学生」という 2 つの名詞句があり、Ochi によれば PL_{assoc} はまず DP_1 (= 太郎) と併合し、 DP_1 が投射する。² そして、 $\{DP_1, PL_{assoc}\}$ が DP_2 (= 日本の学生) と併合し、全体は DP_2 の投射となる。なお Tatsumi (2017) は (5) とは異なる構造を提案しているが、本研究では Tatsumi 分析のエッセンスを採用し、 PL_{assoc} の文法機能は、ある集合 (グループ) とその集合 (グループ) を代表する (あるいは、その集合を特徴づける) 部分 (subpart) の関係を規定すること、と考えて論を進める。例えば、(4a) は日本の学生の集合を指し、「太郎」がそのグループを代表する (あるいは特徴づける) 部分 (そのグループのメンバー) となる。そして (4b) のように、顕在的な DP が 1 つしかない場合でも、常に DP_2 が統語構造に存在することになる。(4c) 及び (5) を参照されたい。

- (4) a. 太郎ら日本の学生
 b. 太郎ら
 c. [DP_2 [DP_1 太郎ら] *ec*]



Ochi (in press) で論じられているように、(4b) のような場合でも DP_2 が存在するという仮説は、中国語の *děng* 「等」を PL_{assoc} として持つ名詞句の振る舞いにその根拠を見出すことができる。概略すると、*děng* 句が動詞の後 (post-verbal) に来る場合、空の DP_2 は容認されず、*ren* (人) や *wupin* (物品) のようなデフォルトと思われる名詞を含め、顕在的な要素が *děng* の後に出現しなければならない。(6) や (7) を参照されたい。

- (6) Wo yaoqing-le bàngōngshì zhǔrèn-děng *(ren).
 I invite-Asp office head- PL_{assoc} person
 ‘I invited a group of people including the office head(s).’

- (7) Wo mai-le shu-děng *(wupin).
 I buy-Asp book- PL_{assoc} item
 ‘I bought a set of items including/represented by a book/books.’

(Ochi in press)

一方で、*děng* 句が動詞の前 (pre-verbal) に現れる場合は、顕在的な DP_2 は義務的でなくなる (ただし、この場合でも、*ren* 等の顕在的な要素があった方が良くと判断する話者もいる)。

² Ochi (2023) では PL_{assoc} を反ラベリング要素として分析している。この点については本論文の最後に簡単に触れる。

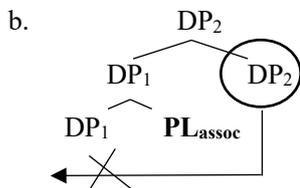
- (8) Bànɡōnɡshì zhǔrèn-děng ?(ren) zuzhi-le huiyi
 Office head-**PL**_{assoc} person organize-Asp meeting
 ‘a group of people including the office head(s) organized a/the meeting’ (Ochi in press)

このような言語事実を踏まえ、Ochi (in press) では、中国語における空 DP₂ は削除操作によって派生されると論じている。これは、Huang (1984) による中国語の空目的語の分析を *děng* 句の DP₂ に適用したものである。(9) が示すようにドイツ語の目的語が省略できるのは節の冒頭位置（トピックの位置）に限定されるという観察を踏まえ、Huang は中国語の空目的語も同様にトピック位置へ移動した後に削除されると論じている。

- (9) a. *e hab’ ich schon gesehen.*
 Have I already seen
 ‘I have already seen him.’
 b. **Ich hab’ e schon gesehen.*
 I have already seen
 ‘I have already seen him.’ (Huang 1984)

Huang の空目的語に対する null topic 分析を *děng* 句の DP₂ に適用してみると、以下の様な説明が可能になる。まず、(6) のように *děng* 句が動詞の後にある場合を考えてみる。先述の通り、Ochi (in press) の提案では、*děng* 句は {DP₁, PL_{assoc}} が DP₂ に付加した構造を持っている。従って、構造上の理由で、前者を残して後者のみを移動することができない。(10b) が示すように、そのような移動は DP₂ の全体ではなく、セグメントを移動することになるからである。これが (6) で空 DP₂ が許されない理由である。

- (10) a. * *ren wo yaoqing-le [bànɡōnɡshì zhǔrèn-děng t_i]*
 person I invite-Asp office head-**PL**_{assoc}

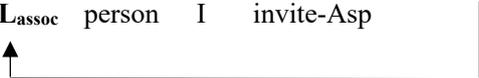


一方、(8) のように *děng* 句が動詞の前（主語位置）にある場合には、*děng* 句がトピックの位置にあると分析できる。従って、この場合には削除が可能になる。なお、本論文では削除は PF において行われると考えたい。それゆえに、統語操作としての移動とは異なり、DP₂ のセグメントを削除できると提案する。

- (11) [Bàngōngshì zhǔrèn-děng ~~ren~~]_i t_i zuzh-le huiyi
 Office head-PL_{assoc} person organize-Asp meeting (Ochi in press)

さらに、*děng* 句がもともと目的語の位置にある場合でも、その目的語全体が主語の前に前置されていれば、空 DP₂ が可能になる。この言語事実も、削除操作自体が DP₂（ここでは *ren* (人)）のセグメントに適用できると考えれば、捉える事ができる。³

- (12) Bàngōngshì zhǔrèn-děng (ren) wo yaoqing-le.
 office head-PL_{assoc} person I invite-Asp
 ‘a group of people including the office head(s), I invited.’

- (13) [Bàngōngshì zhǔrèn-děng ~~ren~~]_i wo yaoqing-le t_i
 office head-PL_{assoc} person I invite-Asp
 (Ochi in press)

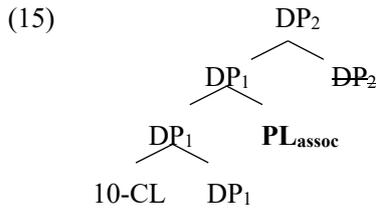
なお、日本語の空 DP₂ に関してはこのような制約はなく、「ら」を含む名詞句が主語位置にある場合でも目的語位置にある場合でも、空の DP₂ は可能である。

- (14) a. 太郎は 阪大生ら (10 代の若者) を招いた
 b. 阪大生ら (10 代の若者) が太郎を招いた

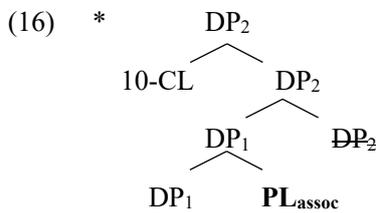
従って、日本語の場合には、空の DP₂ が削除操作によって派生されているという積極的な根拠はないが、本稿では通言語的に PL_{assoc} は常に 2 つの DP を関係づける、という Tatsumi (2017) や Ochi (in press) の考えを採用した上で議論を進めたい（日本語の空の DP₂ の派生方法についての考察は別の機会に譲りたい）。

ここで (1) について再度検討してみたい。(1b) の解釈が可能ということは、(15) が示すように、類別詞表現が DP₁（あるいはその内部の NP）と併合する派生が可能であることを意味する。

³ Ochi (2023) の「反ラベリング」に基づく分析（本論文の最後のセクションを参照いただきたい）によれば、{DP₁, PL_{assoc}} は DP₂ に付加しているわけではないので、「セグメント」に言及しない形で、DP₂ の削除をより自然な形で捉える事ができる。



一方で、(1c) の解釈が生じないということは、(16) の構造が許されないことを意味する。この構造では、類別詞表現が DP₂ (より正確に言えば DP₂ 全体) と併合できないことを示している。



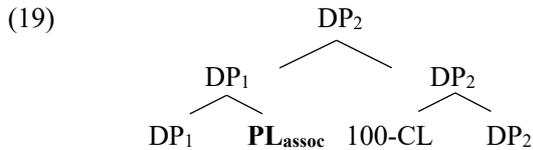
(16) の構造で DP₂ のセグメントが省略されている点に着目すると、(16) を排除する可能性が一つ浮かび上がる。一般的に類別詞表現は空の名詞を修飾できないからである。

(17) 太郎は 5 冊の本を買った。*私は 10 冊の *ec* を買った。⁴

しかし、(16) をこの観点から排除するという考えは妥当ではなさそうである。なぜなら DP₂ が頭在的な場合でも、やはり (1c) に該当する解釈は難しいからである。例えば、(18a) は「5 人の阪大生を含んだ関西圏の若者のグループ」という解釈はあるが、「阪大生を含む 5 人の関西圏の若者のグループ」という解釈を得るのは難しい。この点は (18b) のような例を考えるとより顕著になると思われる。この例文では、(16) の構造において「5 人」を DP₁ と併合し、「100 人」を DP₂ 全体と併合した場合に出てくる語順であるが、容認性はかなり低い。意図した解釈を表すには、(18c) の語順にする必要があるが、これは、(19) にあるように、「100 人」を先に DP₂ と併合し、{100 人, DP₂} を {DP₁, PL_{assoc}} と併合した場合に出てくる語順である。

- (18) a. 私は 5 人の阪大生ら関西圏の若者を (大勢) 招待した
 b. *私は 100 人の 5 人の阪大生ら関西圏の若者 を招待した
 c. 私は 5 人の阪大生ら 100 人の関西圏の若者 を招待した

⁴ なお、この例文には「話者が 10 冊からなるセット本を購入した」という解釈はあるが、ここでは扱わない。



したがって、(16) の構造が許されないという問題は (17) の言語事実とは独立して扱われるべきであろう。⁵

ここで PL_{assoc} の文法的役割に再び着目すると、(16) を自然な形で排除する方向性が見えてくる。先述の通り、Tatsumi (2017) によれば、DP₁ も DP₂ も PL_{assoc} が選択する項であり、PL_{assoc} は両者の関係 (DP₁ は DP₂ の集合 (グループ) を {代表する/特徴づける} subpart である) を規定するものということになる。従って、DP₂ が {DP₁, PL_{assoc}} と併合する段階で (言い換えれば、PL_{assoc} の項となる段階で) 類別詞表現は DP₂ の一部になっていなければ解釈を受けることができない、ということになる。これが (16) の構造の問題である。なお、(19) はその要求を満たした構造になっているため、(18c) は可能な解釈ということになる。

4. おわりに

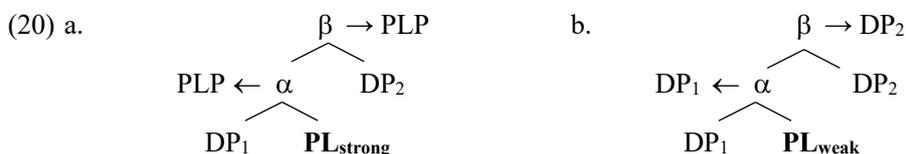
本稿では、日本語及び中国語の PL マーカー (特に PL_{assoc}) と類別詞表現が共起した際の解釈の制約について考察し、PL_{assoc} が 2つの項を取るという Tatsumi (2017) の考えを採用した統語分析を採用して議論を進めてきた。この分析によれば、PL_{assoc} は DP₁ と併合し、その後で {DP₁, PL_{assoc}} が DP₂ と併合することになる。本稿ではこれらの併合が付加操作 (adjunction) によるもの仮定に基づいて議論を進めてきたが、もしそうだとすると PL_{assoc} と DP₂ の統語的な関係に関する疑問が生じてくる。前者が後者を項として選択するにも関わらず {DP₁, PL_{assoc}} が DP₂ に付加するというのは通常を選択 (selection) 関係の構造とは異なるからである。この点について最後に考えてみたい。

本稿では PL_{assoc} が付加によって統語構造に導入されると仮定してきたが、Ochi (2023) では PL を「反ラベリング」要素とした分析を展開している。この考え方によると、PL_{assoc} は弱主要部 (weak head) であり、「反ラベリング」の性質のために、「投射」はしないが、選択 (selection) に関しては通常「強主要部」の場合と全く同じと考えることができる。以下の (20a) が PL_{assoc} が強い主要部の場合である。PL_{assoc} と DP₁ が併合すると、PL_{assoc} が α のラベルを提供する。そして、 α が DP₂ と併合すると、やはり PL_{assoc} が β のラベルを提供する。一方、(20b) は PL_{assoc} が弱い主要部の場合であり、Ochi (2023) が提案した日本語

⁵ (18b) に関しては、数量表現が続けて出てくることが文処理の問題を引き起こし、容認性に影響を与えているという可能性があるかもしれない。しかし、以下の様な例と比較すると、(18b) の容認性の低さは非常に顕著であろう。

(i) ?100 人の 3 人の子供の母親 ‘100 mothers of three children’

の PL マーカーを含む名詞句の構造である。(20a) の場合と同様に, PL_{assoc} は 2 つの DP を項として取るが, 「反ラベリング」の性質のために, α や β のラベルを提供しない。



結果的に, この場合の PL_{assoc} は付加構造を持っている場合と同じ統語構造を形成する。これは Wiltschko (2008) が提唱する ‘modifying plural’ の提案との親和性が非常に高い。そして, 2 つの項を選択するという点では PL_{assoc} が強主要部の場合でも弱主要部の場合でも変わらないことになる。

参考文献

- Chierchia, Gennaro. 1998. Reference to kinds across languages,” *Natural Language Semantics* 6: 339–405.
- Hu, Chenghao and Victor Pan. 2024. Plural markers and classifiers as anti-labelers in Japanese and Chinese. paper presented at the joint conference of The 26th Seoul International Conference on Generative Grammar (SICOGG 26) and The 18th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL 18), Jeonbuk National University, Jeonju, August 22-24.
- Lewis, Becky. 2022. Associative plurality and the DP/NP typology. *Proceedings of the Workshop on Turkic and Languages in Contact with Turkic* 6.
- Li, Yen-hui Audrey. 1999. Plurality in a classifier language. *Journal of East Asian Linguistics* 8, 75–99.
- Ochi, Masao. 2012. Numeral Classifiers, Plural/Collective Elements, And Nominal Ellipsis. *Nanzan Linguistics* 8, 89–107.
- Ochi, Masao. 2023. Plurality in Japanese and (Anti-labeling). A paper read at The Workshop on Theoretical East Asian Linguistics 13, May 12, 2023. National Taiwan Normal University.
- Ochi, Masao. in press. On the syntax of associative plural markers in Chinese and Japanese. *Proceedings of the Thirty-sixth Western Conference on Linguistics (WECOL2024)*, California State University, Fresno.
- Saito, Mamoru. 2016. (A) case for labeling: Labeling in languages without phi-feature agreement. *The Linguistic Review: Special issue on labels* 33:129-175.
- Saito, Mamoru. 2018. Kase as a weak head. *McGill Working Papers in Linguistics* 25.
- Saito, Mamoru, T.-H. Jonah Lin and Keiko Murasugi. 2008. N'-ellipsis and the structure of noun phrases in Chinese and Japanese, *Journal of East Asian Linguistics* 17, 247-271.

- Sugisaki, Koji. 2025. The acquisition of associative plurals in Japanese: A preliminary study. Core-to-core Project Meeting, Osaka University (2025 年 1 月 25 日).
- Tatsumi, Yuta. 2017. A compositional analysis of plural morphemes in Japanese. Proceedings of GLOW in Asia XI, volume 2, 233-241, MITWPL.
- Ueda, Yasuki and Tomoko Haraguchi. 2008. Plurality in Japanese and Chinese. *Nanzan Linguistics: Special Issue 3, Vol. 2*, 229–242.
- Wiltschko, Martina. 2008. The syntax of non-inflectional plural marking. *Natural Language and Linguistic Theory* 26, 639–694.